

研修コーナー

*book review*

The endometrium: A clinicopathologic approach  
Debra S Heller

IGAKU-SHOIN LTD. ¥12,400

編集者のD. S. HellerはColumbia大学産婦人科のassistant professorであるが、産婦人科病理学とくに子宮内膜の臨床病理を専門に研究してきた。本書では、彼女をはじめColumbia大学を中心に5人の著者によって、産婦人科臨床に必要なあらゆる角度から子宮内膜の生理、病理が解説されている。まず、産婦人科独特の子宮内膜の特徴が、超音波所見、子宮鏡所見など臨床的な見地から解説されている。後半では、正常子宮内膜はもとより、endometrial hyperplasiaからendometrial carcinomaまで各種の病的子宮内膜の病理組織所見が、実際の組織写真を示して、懇切丁寧に解説されている。hyperplasiaなどその取扱いに注意が必要な疾患では、治療法や取扱いなどについても詳しく解説されている。また、各種hormoneによる子宮内膜の変化などについても実際に解説されているので、近年増加してきたHRTなどに際しても参考になる。何よりも、超音波所見にしても、病理組織所見にしても、実際の写真を多数用いているので、研修医が実際臨床の場で症例の取扱いをする上で参考になる一冊であるといえよう。

京都大学医学部婦人科産科助教授 佐川 典正

Benign to Malignant Progression in Cervical Squamous Epithelium  
R L Ehrmann

IGAKU-SHOIN LTD. ¥14,900

今や子宮腔部スミアはわが国でも各自治体を中心に、主に30歳以上の女性を対象に大がかりな癌検診事業の一つとして定着している。

腔部スミアに関する興味は、前癌段階としての頸部 dysplasia の分類などから、今日では頸癌との関連からHPV効果に移っている。また、診断や治療をできる限り一元化させるべくアプローチの一つとして、診断用語の簡略化がすすんでいるようである。われわれは子宮頸部の悪性変化を細胞スミアの所見に対応してよりよく理解してゆくためには、新しい所見や概念との関連付けは重要であり、HPVや頸癌の発癌遺伝子との関係を研究してゆく限り生じてくるものである。

したがって、本書では婦人科医や病理専門家に頸部上皮の癌や悪性変化などについて、基本的な形態学所見の紹介のみならず、HPVによる影響や病理学者との間の溝を埋める努力の結果として提唱されているBethesdaの分類を取り上げ、従来の見解と関連付けて解説している。

本書はB5版、全7章、256頁からなり、まず基本的な細胞形態学を論じ、続いて上皮内癌やHPV感染を含む頸部浸潤癌について述べ、浸潤癌への前段階としてのatypical differentiationにも重点をおいて記載している。また、最後には頸部腺癌や、組織生検

・細胞診試料の種々の問題点にまで追求している。総じて、載せている写真も形態学を理解しやすくするために、鮮明なものを豊富に用いており、厚さも手頃なものといえよう。

京都府立医科大学産婦人科助教授 山本 宝

Complications in gynecologic surgery: Prevention, recognition, and management  
James W. Orr Jr. and Hugh M. Shingleton

J B Lippincott Co. ¥14,620  
(医学書院・洋書部調べ)

婦人科では、骨盤外科ともいわれるように、子宮癌や卵巣癌など骨盤内臓器の疾患の外科的治療が中心となることから、それらにともなう周辺組織の損傷など、様々な合併症が発生する。したがって、婦人科臨床を行うにあたっては、手術の術式を習得するだけでなく、これらの手術療法にともなう発生する各種の合併症あるいは副損傷を、その発生機序や治療法を含めて十分に理解しておくことが必須といえる。本書では、循環器系・呼吸器系・造血器系など麻酔や手術操作にともなう一般的な合併症は勿論、婦人科の手術につきものの尿路系の合併症やリンパ管系の合併症についても詳細に解説されている。尿管や膀胱の損傷についてはその修復手技を図解して、実際の取扱いを解説している。また、広汎子宮全摘術などに関しても、骨盤内の神経支配から図解し、膀胱障害や直腸障害をいかに少なくするかが解説されている。

このように、本書は研修医だけでなく実際の臨床に携わるすべての産婦人科医にとって参考となる情報を満載しており、本棚に備えるべき参考書の一つであるといえよう。

京都大学医学部婦人科産科助教授 佐川 典正

Female Urology  
E D Kursh and E J McGuire

J B Lippincott Co. ¥20,230  
(医学書院・洋書部調べ)

本書の編者は二人とも泌尿器科医であるが、各項目の執筆者には泌尿器科医のほか産婦人科医も加わり、総計584頁にもおよぶ立派な書物である。

われわれ産婦人科医はともすれば、色々な泌尿婦人科学の問題について、知識の不十分さゆえ、このまま非手術的にすすめてよいものか、手術を行うかの選択にしばしば戸惑うことがある。したがって、泌尿器系の悩みを抱える女性患者の不安をよりよく解消していくには、産婦人科医自らが泌尿婦人科学の分野にも興味を持ち、研究や教育を行ってゆくことが大切である。幸いにも、一方ではこの分野の必要性や、さらに発展させていく努力の必要性が、多くの臨床家の間で理解されているのも事実である。これからの高齢化社会を考えると、泌尿婦人科学は女性の健康維持には欠かせない領域といえる。

この書物は、われわれ産婦人科医が理解を深めていくことが今後必要とされる女性の泌尿器学について、限なく review している。また、本書は女性が直面する種々の疾患や問題について、解剖、病態生理学の面より理解しやすいよう論理的に解説している。8章から構成されており、内容は①解剖と生理学、②排尿筋と失禁、③尿道失禁、④膀胱・性器脱の処置、⑤泌尿器生殖器の損傷、⑥膀胱腔瘻、⑦緊急、かつしばしばみられる症状などの項目に分けて論じている。とくに、読者が理解をしやすいよう shema が随所に取り入